外気温三十五度をゆうに超えた猛暑日。暗めのタトゥーショップ内から外を眺めると、激しい陽射しが別世界のようにアスファルトに照り返っている。こんな日に外でも出てみろ、真っ先に溶けて消えてしまう……なんてくだらないことを考えて、受付の掃除をしているときだった。カランカランと控えめにドアベルが鳴り、顔を向けると常連の子がひょいと顔を覗かせていて「お！リキ、ごめん。早く着いちった」と戯けて見せた。

「いいよ、外暑いし。お水持ってくる」

「わりーな」

マジであっちい！と声をあげ、店内のソファーに凭れ掛かり、彼は汗まみれのシャツをパタパタと扇ぐ。冷房の温度を低めにし、サーキュレーターを回している間に、勝手に受付からテレビのリモコンをとり、勝手にチャンネルを変えられた。君の家じゃないんですよここは！まったく！と言ったところで彼は絶対に聞かないだろう。

「あともうちょい待ってて。三十分くらい」

ウチの店は早く店じまいをすることにしていてる。常連のミクはいつも、最終に近い時間帯の予約で来る。早く来すぎた？　と言うミクに首を振る。今日はたまたまミクの前が長引いているのだ。

「いや、前のお客さんが長引いてる」

「あーそうなん。了解。てかなんか、最近物騒じゃね？」

「そうだねえ」

ワイドショーはくだらない話を何遍も何遍も繰り返す。

「…げ、なあこれこの辺じゃん！」

ミクがリモコンで指すところ。確かにオレらのスタジオがある近辺だった。

「うっわ、行方不明だって」

「えー…連れ去り？」

「さあ？　でもこの辺、監視カメラめっちゃあるから、すぐ捕まりそう」

「確かにねー」
　戸棚の中にしまってある紙コップにミネラルウォーターを注ぎ、そう言いながら差し出すと、彼は「ここは相変わらずらしいけどな？」とニヤリと笑った。
「おかげさまでね。そう人は減らんよ」
「ふっふっふ」
「今日なんだっけ？ピアス？」
「いや、リカバリー」
「あ、そっかそっか。言ってたね」
　入れたばかりであろう鮮明な赤髪を触ると、ミクは「いいだろ、やっぱ俺って赤だよな」と笑う。昔は茶色か黒色だったのを思い出した。
「金も好きだったよ」
「ふはは。そう？でも今はリキの専売特許じゃん」
オレの金髪を見てそう言った。俺も長いこと金髪を維持している。たまにハイトーンでいろんな色を入れたりしたけど、結局この色に落ち着いてしまった。
　ミクと髪の話や服の話、新しいタトゥーの話なんかしていたらあっという間に時間が経っていて、施術室からお客さんが出てくるところだった。
「いつも有難う流星くん」
　可愛いワンピースを着たロングヘアの子が愛想を振りまいて、流星と他愛も無い会話をし始めた。ところが、流星はちらりとオレらを見て、早々にその会話を切り上げてしまった。その意味するところはつまり、まあそういうことだ。ミクは流星を気に入ってて、流星もまたミクを気に入っていることはとっくに知っているし、邪魔をされたくないか、少しばかし時間が欲しいといったところだろう。こんなところまで頭が回るようになってしまった自分が虚しい。
「いいえー、こちらこそ」
　じゃあまた、とお客を見送った後、流星はこっちを見て

「早くない？」と言った。
「あちーし早く来たかったの！」
「ほーん。そんなに俺に会いたかった？」
「殺されたいんか？」
　ミクと流星が顔を合わせるとすぐこれだ。お互いにお互いが嫌いなわけじゃないんだろうに、なんでこうなるかな？と頬杖をついて２人のやりとりを見守る。
「だってわざわざ俺指名じゃん。リキでもいいのに」
「お…、だって流星のタトゥーは好きだから」
　そう言ったミクも言われた流星も黙り込んでしまって、シンとした空気になった。
　……なんで照れてんのこの二人、マジで分からんわ。
「いや何見せられてんのオレ？」
　思わず口を出た言葉に、ミクがハッとして「いやまあそういうことよ！」と流星を置いて勝手に施術室に入ってしまった。
　流星はぽかんとした顔をして「いや、分からんな？」とオレに同意を求めた。けど、申し訳ないがオレもさっぱり分からん、おふたりさんが。
　まあ仲はいいんだよ、多分ふつうに。ただお互いに距離を計りかねてるかんじはする。もう出会って何年経ったんだかね、というオレのぼやきは二人には聞こえなくなった。はいはい、掃除、掃除しますよオレは。

　個室に入ると、ベッドとテーブル、マシンがごちゃごちゃに置いてある。リカバリータトゥーのために、俺は穿いていたデニムを脱ぎ捨て、ベッドに寝転がる。
「寝れそー！」
「それいっつも言ってんね」
　ゴム手袋をつけた流星の指が、そうっと太腿に触れて、決めたデザインの印刷されたカーボン紙を押し付けた。

「こんな感じかな」

切り抜かれた用紙の位置を確かめ、転写用クリームを塗られる。肌にしっかりクリームを馴染ませた後、カーボン紙を上から重ね、ぐりぐりと擦り合わせると皮膚に下絵が綺麗にうつる。この瞬間を見てるのが一番好きだ。

綺麗に転写されたデザインを見て「いいじゃん」と言うと、全身鏡を指さされる。確認しろってことね。

――随分前に初めて入れたタトゥーはなんだか味気なくて、つまんなくて、俺の肌に居座るにはちょっと物足りなかったものだった。それでSNSを眺めてたら、良さげなタトゥーを載せてるアカウントがあって、それが流星のアカウントだった。それから三、四年の付き合い。

初めはめちゃくちゃ距離があって、仲良くなれそうもねーなんて思ったけど、そんなことはなかった。というかほぼほぼリキのおかげな気がするけど。

「どう？それでいい？」

「うん。いい」

鏡の前で確認して、ついでに引きで写真も撮ってもらって確認する。

流星に入れてもらったタトゥーは数知れず。小さいものも大きいものも、全部こいつに入れてもらった。もっと腕のいいアーティストもいるけど、俺はこのスタジオの雰囲気とか、緩い感じが好きだった。流星の描く絵はなんだか、いい意味でも悪い意味でも〝呪い〟みたいで、俺は好きだ。

ベッドに戻って、脚を投げ出し、また寝転がると流星の大きな目とかち合った。じゃあ始めるよ、という声に頷いて、俺は瞼を閉じる。同時にジ、と肌を焼くような痛みが太腿に走った。

しばらく目を瞑っていた――だけだと思っていたら、がっつり寝ていたらしい。流星が半笑いで「よだれ出てる」と俺の肩を揺らした。